

目 次

I 年次研修報告

「初任者研修」を終えて（山内 孝太）・・・・・・・・・・・・・2

中堅教諭等資質向上研修（小栗 美香子）・・・・・・・・・・・・・5

II 研究発表

複数学科・コースを有する高等学校における地域と連携した探究活動の推進
～「北鷹スタイル」の確立を目指して～（探究活動推進部主任 柴田 創一郎）・・・・・・・・8

III 事業報告

令和元年度「生徒の英語力強化のための英語指導力向上事業（英語教育改善プラン推進事業）」
（英語科 山條 陽子 高橋 矢壽子 伊藤 健吾）・・・・・・・・11

IV 研究授業

国語科「国語総合」 （授業者 乳井 貴子）・・・・・・・・・・・・・12

理科「化学基礎」 （授業者 関根 基己）・・・・・・・・・・・・・15

地歴公民科「日本史A」 （授業者 山内 孝太）・・・・・・・・・・・・・18

家庭科「家庭基礎」 （授業者 小栗 美香子）・・・・・・・・・・・・・21

数学科「数学A」 （授業者 石黒 翔之）・・・・・・・・・・・・・26

英語科「コミュニケーション英語Ⅲ」 （授業者 山條 陽子）・・・・・・・・・・・・・29

I 年次研修報告

「初任者研修」を終えて

山内 孝太

1. はじめに

4月に行われた辞令交付式から、まもなく1年が過ぎようとしている。今年度を通じて校内外の数多くの研修に参加させていただき、教育公務員としての心構えをはじめ、継続的な授業改善や学級経営、生徒指導、危機管理等についての基礎的・基本的事項を多数学ばせていただいた。ここで、主な初任者研修に関する概要や感想を記し報告する。

2. 校内研修について

①一般研修

一般研修では、校長先生をはじめ、教頭先生、各分掌主任の先生方など、多数の先生方よりご指導をいただいた。本校の教育目標、校内組織と服務規程、危機管理体制などについての研修を通じ、業務の遂行にあたっては情報を共有する教員間のコミュニケーションが重要であることを学んだ。また、各分掌での研修では、生徒の動静観察や保護者等の対応における傾聴姿勢、疑問や違和感を抱え込まない点などを学んだ。教諭としての責任を全うするためにも、周囲を信頼し、信頼されるよう職務に当たらなければならないと感じた。

②教科研修

教科研修では、指導教員の清水先生を中心に、地歴公民科の先生方より研究授業と研究協議、学習指導案の作成、生徒の実態に応じた指導方法など、具体的な授業方法についてご指導をいただいた。また、他教科の先生方にも、導入の工夫や発問の設定など、地歴公民科とは異なる視点からのご指導を数多くいただいた。今後は地歴公民科のみならず、他教科の先生方とも連携した授業を実施するなど、目まぐるしく変化する現代社会に対応できる、総合的な力を身に付けさせる授業を実践できるよう日々の授業改善に励みたい。

3. 校外研修

①総合教育センター主催の研修

総合教育センター主催の研修は、全9回（述べ10日間）実施され、授業づくりの基本からICTの活用、生徒の安全やいじめの未然防止、ホームルーム経営、特別な支援を要する生徒への接し方など、学校で想定されるあらゆる場面に対応するための基礎を幅広く学ぶことができた。

また、講義を聴くだけでなく、演習や協議を通じて他の先生方との意見交換を通じて気づかされること、学ぶことも多かった。今年度の高等学校初任者研修対象者は、13名と例年にない少人数であったが、少



人数であるからこそ、互いに切磋琢磨し、今後の教員生活をより充実したものにした
と思う。

②高校教育課主催の研修

高校教育課主催の研修は、総合教育センターと合同で実施されたものも含め、計 5
回（延べ 6 日間）実施された。ここでは、主な研修の実施概要と感想等をそれぞれ述
べる。

（1）PA 研修

PA 研修は、対話や協働を核とした活動を通じ、集団作りの方法を学ぶ一泊二日
の体験型の研修であった。数々の課題を乗り越えていくなかで信頼関係を築き、チ
ームとして目標を共有すること、協力し合うことの大切さとその方法を体験的に学
んだ。学級や部活動など、集団としての意識が重要な運営に積極的に活用してい
きたい。特別支援学校の先生方との合同の研修であったため、他校種の先生方との意
見交換も行うことができ、大変有意義な 2 日間であった。

（2）授業研修

秋田明德館高校を訪問し、定時制課程の様子を見学させていただいた。全日制課
程と違い、年齢や学力、進学理由も様々な中で行われる授業は全日制とは異なる緊
張感があり、多様な学習ニーズに応えることの大切さと難しさを学んだ。また、生
活体験発表会も参観させていただき、学校という場が生徒の人生に与える影響の大
きさを再認識した。

（3）特別支援学校訪問

特別支援学校訪問は、比内支援学校で行われた。作業学習の体験では草木染に参
加し、実際に生徒と交流させていただいた。特別支援学校では生徒の能力に応じて
できる作業を担当させており、生徒一人ひとりへの個別対応の重要性、具体的なア
プローチを学んだ。インクルーシブ教育の理念の下、合理的配慮が普通高校におい
ても必要であることを感じた。総じて、支援が必要な生徒に対する自分の経験・知
識が不足していることを痛感させられた研修であった。

4. おわりに

教諭として迎えた 1 年目は、自身の一層の責任の重さを自覚する、大変緊張感のある
1 年であった。教育公務員としてこの仕事をする上で必要な知識や経験を、この初任者
研修から得ることができたと感じている。本県の教育に携わるものとしての責務を果た
すと同時に、自身のこれからの教員生活をより充実したものにするため、この研修の成
果を確実に自分の中に留め、さらなる研鑽に努めていきたい。

最後に、この 1 年を通じた初任者研修では、校内外問わず本当に多くの先生方にご協
力とご指導をいただいた。この場を借りて謝意を表したい。

地理歴史科（日本史 B）学習指導案

日 時 令和元年 10 月 9 日（水）3 校時
 対象クラス 2 年 B 組 選択者 17 名（男子 7 名 女子 10 名）
 場 所 2 年 B 組教室
 授 業 者 教諭 山内 孝太
 使用教科書 『詳説日本史 改訂版』（山川出版社）

1 単元名

第 3 章 貴族政治と国風文化 第 1 節 摂関政治

2 教材観

9 世紀後半以降、日本ではそれまでの天皇を中心とした律令体制が変化し、次第に貴族へと政治権力が推移していった。藤原北家の台頭によりはじまった摂関政治は、まさにその象徴であった。また、この時期は唐の滅亡に代表されるように、東アジアの国際関係も大きく変化した時期である。政治の動静のみならず、このような社会情勢が後の国風文化の発達の背景となったことにも気付かせたい。本時はその中の 1 時間目として、藤原北家が他氏排斥と天皇家との姻戚関係によって、摂関家としての不動の地位を確立するまでを扱う。藤原氏のみならず、政権を奪われるかたちとなった天皇側の立場にも着目させ、多面的な視点も育てたい。

3 生徒観

自発的な発言は少ないものの、指名した際には自分の意見をしっかりと述べるができる生徒たちであり、授業に取り組む姿勢もいたって真面目である。その一方で、中学校までの学習内容が定着しきっておらず、既習内容を踏まえた考察や史料の読解を苦手とする生徒が多い。考え込んで発言できなくならないよう、考察のポイントを示す、質問で誘導する、複数名で協力して考えさせる等、指導の工夫が必要である。

4 単元計画（全 3 時間）

1 藤原氏北家の発展...1/3（本時） 2 摂関政治...2/3 3 国際関係の変化...3/3

5 単元の評価規準

関心・意欲・態度 (A)	思考・判断・表現 (B)	技能 (C)	知識・理解 (D)
摂関政治の影響を、それ以前の政治と比較しながら意欲的に追求することができる。	摂関政治成立の過程と影響を、当時の社会状況を踏まえて考察できる。	資料等から当時の社会の様相を読み取ることができる。	摂関政治の成立と展開の過程を知識として身に付け、社会状況と関連させて理解している。

6 本時の指導目標

摂関政治の成立により、藤原氏の政治的影響力が天皇まで及んだことを理解させる。

7 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	本時の学習内容を確認する。	「摂政」「関白」の意味を確認する。	
	本時の目標：藤原氏の政治的影響力の大きさを理解する。		
展開① 20分	- 藤原北家について復習する。 - 藤原氏の他氏排斥について、各自教科書で調べながらプリントに記入し（3分）、ペアで確認する（2分）。 - プリントに記入し、外戚について理解する。	- 藤原四家の興亡を簡潔に説明する。 - 机間指導で教科書の記述箇所等を助言する。 - 排斥された氏族に着目させ、有力氏族が対象となったことを理解させる。 - 外祖父の影響力をイメージしやすくするため、「サザエさん」の家系図と天皇家の家系図を比較させる。	
	Q. 天皇家が実権を維持する方法はなかったのだろうか？		
展開② 20分	- 天皇家が実権を維持する方法を考え（3分）、グループでまとめて発表する（5分）。 - 宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇の政治について理解する。	- 机間指導で考察の観点等を助言する。 - ホワイトボードを配付し、グループの意見を書かせて掲示する。 - 生徒の意見を利用して説明する。	天皇家と諸氏族の関係を踏まえた考察ができているか (B) 。【プリント】
まとめ 5分	- プリントの空欄を自分の言葉で補充する。 - 代表生徒数名が発表する。	- 藤原氏の勢力拡大の流れを年表で整理する。 - 机間指導で本時のポイント等を助言する。	

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	秋田県立秋田北鷹高等学校	職・氏名	教諭 小栗 美香子			
研 究 内 容	A：本県教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 D：教科指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他					
研究テーマ	D 教科指導に関する研究 「地球市民を育てるための授業づくりについて」					
1 研究の概要 前年度までの JICA 海外協力隊でのボランティア活動経験を生かすための授業づくりを行った。家庭科指導要領解説に「社会との関わりの中で営まれる家庭生活や地域の生活への関心を高め、生涯を見通して生活を創造する主体としての視点が必要となることから、持続可能な社会の構築を目指し、グローバルな視点に立って生活の現状を見つめ、なぜそうするのか、どうしたらよいかという課題意識を持つとともに、実践的・体験的学習活動を通して家族・家庭、衣食住、消費や環境など家庭生活の様々な事象の原理・原則を科学的に理解すること、及び、それらに関わる知識と技能を生活上の意思決定や問題解決に生かし、男女が協力して、家庭や地域の生活を主体的に想像する資質・能力を育成することが大切である。」と記載されている。これを踏まえて評価項目について、“関心・意欲・態度”では多様な文化や価値観を共感し尊重しグローバルな視点に立って物事を考えていることを、“思考・判断・表現”では自国と他国のつながりを踏まえ、問題の解決策を考えることを、“技能”では物事を論理的に考え、問題の解決策を表現できることを、“知識・理解”では物事を地球的視野で考え、問題を発見できることに重点を置いて授業づくりを行った。 単に、海外の事情を知るのではなく、生徒自身の生活と結び付けて考え、課題解決を考える授業を行うことがグローバル社会で生きる力につながると考えた。地球市民として、広く情報を集め、つながりを理解したうえで生活課題を発見する力を養うことを目的として、教材開発を行った。						
2 成果と課題 前年度のボランティア活動を踏まえた授業案を5つ考えパワーポイントデータにまとめた。家庭基礎では食生活分野の導入、タンパク質、世界の住居について扱うときに、フードデザインではおいしさについて考える授業でこれらを用いた。授業後の生徒の感想では、「現地の様子は想像と違う。」「どこにあるかもわからない国のことだが、関係ない国ではないことがわかった。」「ザンビアだけではなく他の国についても知りたいと思った。」というような広く物事を知ろうという意欲を高めているような感想が多く見られた。約1割の生徒は「怖い。」「汚い。」「絶対にいきたくない。」とマイナスイメージを強く持つ生徒もいた。しかし、そのような生徒であっても、食品流通や栄養課題など身近な話題と絡めて物事を理論的に考え、持続可能な社会の構築のために何ができるかということを考えていた。 ボランティア参加前の授業では、インターネットや書籍などのデータをあり合わせて授業を行っていたが、今年度は実体験を踏まえて授業を行うことができた。 課題としては、これらパワーポイントのデータが他の教員や他教科の教員と共有がある。パワーポイントデータを作成する際、なるべく現地を見たことがなくても説明が可能となるように作成した。今後このデータを多くの教員と共有し、加筆訂正するなどして授業内容を精査していきたいと考えている。帰国後、現地で生活を教えて欲しいという他校の家庭科教員の声が多く上がったが、それらが授業に結びつかなければ、単純な旅行記を話して終わりとなってしまふ。貴重な経験が多くの授業作りの糧となるよう、多くの教員と連携をとっていきたい。 また、日々社会情勢が変わる中、私たちの暮らしも常に変化している。物事を広く、地球全体でとらえ、自らの生活を少しずつ改善する意欲や態度、実践力を付けるための授業づくりを今後も継続していきたい。						
(A 4 判 1 ～ 2 枚程度、研究に関わる資料等があれば添付すること)						

選 択 研 修 報 告 書

所 属 校	秋田県立秋田北鷹高等学校	職・氏名	教諭 小栗 美香子
研 修 先	社会福祉法人 北秋田市社会福祉協議会 グループホーム ふなみ		
研 修 期 間	令和元年7月23日（火） ～ 令和元年7月25日（木）		

1 研修の概要

研修の内容は以下の通りである。

1日目 8:30～10:30 排泄介助など 利用者の方はロビーでテレビを見るなどしてくつろぐ。
10:30～ あじさいドライブのための外出準備
11:00～ あじさいドライブ
あじさいを見るために翠雲公園へ出かける。写真撮影
12:00～ 帰着、昼食、食事介助、見守り
15:00～ おやつ、水分補給、食事介助、見守り、排泄介助
17:00 終了

2日目 8:30～10:30 排泄介助など 利用者の方はロビーでテレビを見るなどしてくつろぐ。
12:00～ 昼食、食事介助、見守り
14:00～ 入浴介助
15:00～ おやつ、水分補給、食事介助、見守り、排泄介助
17:00 終了

3日目 8:30～10:30 排泄介助など 利用者の方はロビーでテレビを見るなどしてくつろぐ。
11:30～ 昼食、食事介助、見守り
13:00～ 鷹巣まつり 子ども神輿見学、写真撮影（施設前玄関にて）
15:00～ おやつ、水分補給、食事介助、見守り、排泄介助
17:00 終了

認知症対応型のグループホームにて、介護のあり方を学んだ。研修先では要支援2から要介護5までの利用者の方がおり、利用者の方は16名であった。1日目は要介護の方が多い1階を、2日目以降は立つ、歩く等が自分でできる方が多い2階で食事の見守りや排泄の介助を行った。いずれのフロアも認知症の判定が出ている方が多く、会話のつじつまが合わないことも多く、同じ会話を何度も繰り返すということもよくあった。

1日目はあじさいドライブとして、リフトカーなどで近くの公園に出かけ、あじさいと一緒に写真を撮ってくる行事があった。外出をすると利用者の方の表情も明るくなっていた。

3日目は、鷹巣神社祭典があり、こども神輿が施設前玄関に来てくれて、全員で写真をとるという行事があった。幼い子ども達の様子をみて、昔を思い出す利用者の方が多くいたように思われた。

認知症にはアルツハイマー型、脳血管性認知症、レビー小体型とそれぞれ原因は分かれる。症状は人それぞれであるが、研修先では、トイレトペーパーを集めて流してしまう癖がある方への配慮として、ペーパー類は隠して収納したり、子どもに会いたがり帰宅要求をする方をなだめたりと利用者の方の特徴を一人一人よく理解して対応されていた。職員の方は、利用者の方が今までどのような人生を歩まれ、どのような家族構成であるかも理解し、なぜそのような症状になるかということも考えつつ、チームで介護をされていた。勤務形態も日勤や夜勤、早番、遅番と様々であったが、職員が入れ替わるごとに、しっかりと引き継ぎをしていたことと、何時に何をしていたかということをしつかりと記録していたことが複数の目で見守ることに重要だと思われた。認知症の方と向き合うことは、相当な労力を費やす。介護する側の自己管理能力もとても大切であると感じた。

2 研修の成果（今後の生かし方も含むこと）

職員の方が、介助するときに「極力できることはやってもらっています。すぐに助けてしまうとすぐにできなくなってしまうから。できなくなったことをできるようにするにはとても大変な労力がかかるのです。」と話していたことが印象に残っている。他の施設であれば車いす移動でもよい状態の方も職員の方の支えや声かけなどで一生懸命歩いていた。小さなカップを持つことも困難そうな方も一生

懸命、自分で食事をしていた。残存機能を生かす介護のあり方とはどういうことを言うか、この研修を通して学ぶことができた。

今回の研修を通して、①水分のとらせ方の実習、②認知症特有の会話について、③施設で介護するということの3つのテーマで授業ができると考えている。

①水分のとらせ方については、自分で飲むことが難しい方に飲ませやすい体勢をどのように作るか、また、飲むことを忘れて、熱中症になるということもあるため、意識的に飲んでもらうためにどのような工夫ができるか生徒に考えさせたい。

②認知症特有の会話については、グループホームで実際にやりとりをしたことを踏まえ、生徒に自分だったらどのように対応するか考えさせたい。会話例としては、夕方になると「家に帰ってご飯をつくらないと行けないの。私帰るわ。」という例や「私の子どもはどこにいるの?」と探し回る例がよいかと考える。

③施設で介護するということについては、ロールプレイングで家族の介護を考えさせたい。施設の介護の様子や利用料金などを提示し、家族の介護について、生徒に考えさせたい。

現在まで、介護の授業では演習やロールプレイなどを取り入れて授業を行ってきた。しかしどれも、教科書や資料集に載っている情報を頼るのみで、実際の介護の様子を知らずに授業を行っていた。今後は、今回の実習をいかし、介護の現場で見たことや体験したことをヒントに授業を行っていきたい。

Ⅱ 研究発表

1 研究の背景

昨年3月、新学習指導要領が告示された。改訂の基本方針として、その学校で育成すべき「資質・能力」を明確にし、それを社会と共有し、社会と連携して取り組む、所謂「社会に開かれた教育課程」が強調された。また、高等学校においては、「総合的な学習の時間」にかわり「総合的な探究の時間」が新設され、探究する課題の設定にあたっては「実生活・実社会と、自己との関わりから問いを見いだす」ことが強調された。本校は平成23年4月に、鷹巣高校・鷹巣農林高校・合川高校・米内沢高校の4校が統合して誕生した、県内最大規模の統合校である。3学科6コースを有し、平成25年から昨年度まで、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール（以下SSH）の研究指定を受けた。昨年度の卒業生の進路状況は、県内就職を希望する生徒が約6割を占める。少子高齢化の進むペースが、県内有数と言うより、国内有数のペースで進む北秋田市において、本校は「地域の将来を支える人材を輩出する責任を背負った高校」であると言える。

2 本校が直面した課題

以上の背景を踏まえ、本校が今年度直面した課題は次の2点である。

- ① SSH終了後の学校設定科目「課題研究」への対応
- ② 新設科目「総合的な探究の時間」への対応

3 解決に向けて

2つの課題の解決に向けて、着目したのは「地域」である。1年生の新設科目「総合的な探究の時間」において、地域の観光資源に着目した探究活動を実施した。2年生は、特進コース（1クラス）では「SSH経験校としての科学研究」を継続し、優秀な班は校外での各種発表会に進める道を残した。特進コース以外の普通科探求コース（3クラス）に対して、北秋田市役所と連携した地域課題解決学習プログラムを新たに開始した。2, 3年の農業科（生物資源科・緑地環境科）は、それぞれの学科の特色に即した課題研究を継続した。統合により複数の学科・コースをもつ本校の特色を活かしつつ、SSH終了後、特に普通科においては「地域との連携」を重視した課題研究をスタートさせた。

4 2年生普通科探求コース「課題研究」

【内容】

「北秋田市の現状と課題」を大テーマとして、「自殺対策・移住定住・ごみ対策・防災減災」の4つについて北秋田市長及び、各担当部署の職員から講義を受け、生徒が高校生な

りの視点で解決策を模索した。

【主な取組】

生徒は、希望したテーマについて、グループで研究をすすめ、取材等のため、積極的に校外に出る姿が見られた（写真①）。7月と11月の2回、市の担当者を招いて研究の進み具合を報告し、助言を受けた（写真②）。12月、全グループがポスター発表を実施した。発表会には、市の担当者も来校して参観し、発表後には、テーマごとに分かれて講評を受けた。

【評価方法】

- ・生徒アンケート・職員アンケートの実施
- ・評価規準表の作成・共有
- ・1枚ポートフォリオの活用

5 1年生「総合的な探究の時間」の取組

【内容】

「地域への関心・愛着」を育むことを目的に、「観光」を大テーマにした探究活動を実施した。

【主な取組】

内陸線の存続活動を行っている大穂耕一郎氏、地域の観光資源の活用に関して積極的な活動を展開している秋田犬ツーリズムの事務局長大須賀信氏等から講話を受けた。講話実施後、生徒はグループに分かれて地域の観光資源に関して情報収集を行い、12月にポスター発表を実施した（写真③）。発表会には、講話を行った方々が来校・参観し、発表会後には講評を受けた（写真④）。

【評価】

- ・生徒アンケート・職員アンケートの実施
- ・1枚ポートフォリオの活用
- ・指導要録への記述評価

6 成果と課題

【成果】

生徒アンケート中の「積極的に学ぶことができたか？」という問いに対して、約7割の生徒が4段階のうち、最も肯定的な選択肢を回答した。また、「身に付いた力は何か？」という複数回答可の選択肢の中で、最も多く選ばれたのは「他の人と協力する姿勢」であった。テーマ設定から発表に至るまでの長丁場を、グループ内の協力で乗り切ったという実感をもった生徒が多数だったと思われる。興味・関心の高まりについては、観光をテーマに研究した1年生、地域課題を扱った2年生ともに約半数の生徒が「高まった」と回答した。次年度以降、この自己評価がもっと向上する仕掛けを考えたい。

S S Hの指定校時代よりは、全職員体制で取り組めたと感じている。理系の科学研究を行っていたころは、理科の教員が指導も評価も運営も、一手に担っている面があったが、地域課題をテーマとした今年度は、日常の指導はもちろん、文系教科の教員も発表会の審査に加わるようになった。また、市役所の職員等が定期的に来校して進捗状況報告会などを行ったことにより、生徒はもちろん、職員も良い緊張感をもって指導にあたれたと感じている。

【課題】

次年度、改善を要する事項を列挙する。

- ・教員間の指導・取組の温度差、研修の不足の解消
- ・テーマの自由度の不足
- ・評価（グループ評価と個人評価のバランスや客観性 等）
- ・その他（民間企業との連携、S D G sの視点、予算獲得 等）

写真① 市内のスーパー入口でインタビュー（防災・減災研究班 令和元年9月）

写真② 第2回進捗状況報告会（自殺対策班 令和元年11月）

写真③ 校内課題研究発表会（本校第1アリーナ 令和元年12月17日）

写真④ 発表後の講評（本校大講堂）

写真①



写真②



写真③



写真④



Ⅲ 事業報告

現状の課題

- ・英語に対する苦手意識をもっている生徒が多く、自発的に発言する機会が少ない。
- ・授業における英語使用状況に、担当者によって差がある。

具体の取組の内容

①校内の英語科共通の取組

- 1年生→「自分の意見を英語で述べることができる」
- 2年生→「相手の意見に対して質問をする」
- 3年生→「相手の意見に対して反駁する」
- ※平成30年度からの継続

②公開授業の実施

目的①デベートの要素を取り入れた言語活動による授業改善

②CAN-DOリスト形式の学習到達目標の活用と評価の工夫

③生徒の英語による言語活動時間の増加

第1回：7月 9日 参加者12名
第2回：12月10日 参加者16名



＜第2回公開授業の様子＞

成果①

【英語学習に対する興味・関心の向上】

①秋田県高等学校学習状況調査（現2年生）

※「英語が大変好き」の合計が微増

	本校 H30	本校 R1	県全体 R1
英語が大変好き	12.5%	7.4%	11.3%
好き	26.0%	34.2%	27.8%

- ②秋田県即興型デベート大会への参加
- ・3年生2チーム、2年生1チームが参加し、予選リーグで各チームが1勝
- ・2年生は参加希望調査の結果、大半が意欲的であった。

成果②

【授業改善に対する意識の変化】

①秋田県高等学校学習状況調査（現2年生）

（上段：そう思う 下段：どちらかと言えばそう思う）

※「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計が微増

	H30	R1
授業で自分の考えを発表する機会が与えられている。	55.5%	52.6%
生徒同士で意見交換したり、自分の考えを発表したりする活動をよく行っている。	33.5%	38.4%
生徒同士で意見交換したり、自分の考えを発表したりする活動をよく行っている。	62.5%	54.2%
生徒同士で意見交換したり、自分の考えを発表したりする活動をよく行っている。	26.0%	36.3%

- ②英語教育実施状況調査
コミュニケーション英語ⅠⅡⅢで「発話を50%以上英語で行っている」教員
H30 5人中3人 R1 5人中5人
- ③第2回公開授業研究協議会指導助言
・ワークシートが生徒にとって分かりやすくすばらしかった

今後の課題・方向性

- ①学年ごとの取組の具体化
・中学校の公開授業に参加し1年生の授業に生かす。
- ・各学年の年間目標をさらに細分化し、段階的な目標を英語科職員で共有し実践する。
- ②評価方法の工夫
・CAN-DOリストにパフォーマンステストの時期を明記する。
- ・パフォーマンステストの評価方法について科内で検討する。
- ③教員の授業力向上
・語彙力不足の生徒に対する授業中の指導方法について検討する。
- ・授業のアイデアを共有する。

IV 研究授業

(国語総合) 学習指導案

授業者 教諭 乳井 貴子

対象クラス 1年B組(33名)

日時 令和元年5月29日(水) 3校時

使用教科書 国語総合(教育出版)

1 単元名 小説1『羅生門』

2 単元目標

- ・作品の内容に応じた表現の特色に注意して読む。
- ・作品に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わい、主題について考える。

3 生徒の実態 他者への受容的な雰囲気があり、気軽に発言しやすい比較的国語向きの集団である。

4 単元計画

1 全文朗読を聞き、初読の感想をまとめ、疑問点を挙げる。	1時間
2 疑問を吟味精選(ペアワーク)する。構成を理解する。	1時間
3 各段落における疑問を共有し主題に迫る。読みの視点を確認する。	6時間
4 ホットシーティングを通して、作品の理解を深める。	1時間(本時)
5 小説の主題を理解する。	1時間

5 単元の評価基準

知識・技能(A)	思考力・判断力・表現力(B)	学びに向かう力・人間性(C)
・登場人物の人物設定や情景描写、比喻などの表現効果を理解している。 ・小説の読みの視点とはどうあるべきか理解し、読解を深めている。	・物語の時間や場所、登場人物の設定を的確に整理している。 ・「下人」の心理が老婆との関わりからどのように変化しているかを読み取っている。	・場面の推移に従い、登場人物の心情や行動がどのような表現で描かれているか理解しようとしている。 ・人間のあり方や本質についての考察を深めている。

6 本時のねらい 「下人」へのインタビューを通して、登場人物像及び作品世界の理解を深めさせる。

7 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・小説の読みの視点はどうあるべきかを振り返る。 ・本時の目標をつかむ。	・ペアで確認し、自分の言葉で表現させる。 ・ホットシーティングの説明。 ・インタビューの形式を確認する。(下人役の発表)	
	本時の目標:「下人」へのインタビューを通して、下人の人物像や小説全体の読みを深める。		
展開 40分	・質問事項の吟味・精選(ペアワーク) ・「下人」へのインタビュー(ホットシーティング) ・「下人」はどんな人物であったか、200字でまとめる。	・ペアで質問と応答のやり取り(シミュレーション)をさせ、下人が応答不可能な問い(作品世界から逸脱しすぎている)がないように指示する。(読みの深まりにつながる質問) ・インタビュアーは挙手をし、「下人」が指名する。(役になりきって答えていくこと・一問一答で終わらず、違うと思ったら、更なる質問)	(B)応答を通して下人に対する理解を深めている。
まとめ 5分	・本時の振り返りと次時予告。	・「下人」と自分との距離感がどうなったか。なぜそうだったか。	

8 本時(本単元)における「生徒の質問力向上」に向けた取組
「効果的な問い」が読解を深めることの意識付け。

北鷹研修部通信 第2号（職員用）

令和元年6月5日（水）

秋田北鷹高等学校研修部

★第1回提案授業レポート（Aグループ）

授業日：5月29日（水） 1年B組 国語総合 （授業者 乳井先生）

「ホットシーティング（※）」の手法を生かした画期的な授業展開。前時まで教材をしっかり読み込んでいる「下人」役の生徒達の回答に、教室は大いに盛り上がりました。一見「制御不能」に陥る危険性をはらむ授業方法にも見えましたが、コーディネーターを務めた乳井先生の見事な手綱裁きにより、授業前よりも生徒の理解が深まりました。

※ 1人が登場人物や語り手になりきり、他の生徒が質問を投げかけ、質疑応答を通じて作品の理解を深める学習方法。



主要人物「下人」への質問を吟味・精選する生徒達。作品から逸脱した質問（応答不可能な質問）をカットするよう、授業者から指示がありました。事前のこの指示により、質疑応答において、大きな逸脱が起きませんでした。

（授業前の打診もなく）「下人」役に指名された生徒3名。主に回答する生徒（中央の男子）1名にプラスし、「ブレン役・サポート役」として女子生徒2名も加わりました。これにより、質疑が停滞することがなく、授業が進行しました。



「下人」へのインタビューが始まると、次々と手が挙がり、活発な質疑応答が続きました。「一問一答」で終わることなく、納得いかないと重ねて質問を続ける生徒も複数いて、「質問力」育成の場として機能している印象を受けました。

★協議会レポート（Aグループ）

5月30日（木） 15：45－16：30 会議室



★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果

★成果（○）と課題（▲）

○「ホットシーティング」という方法により、学習意欲・コミュニケーション能力ともに伸ばす授業になっていた。

○ペアワークや質疑応答が成立・機能している。日常の指導の賜物である。

○質疑応答が「一問一答」で終わっていない。

▲インタビュアーの生徒達は、どの程度頭を使ったのか疑問である。

（下人役の生徒の思考力は向上したと思うが…）

▲今回は「できる子」がクラスにいたから成立した方法。大きく逸脱した場合の対応は？

▲授業者の「読みを深める」「登場人物との距離感」という言葉の意味が分かりにくい。

（国語科では常用される語なのか？）

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・「ホットシーティング」という手法。インタビューとインタビュアーの活用が参考になった。
- ・1人ではなく「サポート役」の生徒をつけた発表の仕方。
- ・生徒間のやりとりが中心で、教師主導ではなく、活発であった。
- ・他学科、他教科、指導の手法、クラスの雰囲気、授業への向かい方など大変参考になりました。

★成果と課題を共有しましょう！

今回の各グループの協議会で使用した模造紙を、印刷室及びお茶・コーヒーコーナーに掲示中です。掲示場所の選定理由は「先生方が、職員室内でちょっと足を止めるところ」です。

授業のプリントの印刷中、お茶で一服中、今回の提案授業の成果と課題をちょっとご覧ください！



理科（化学基礎）学習指導案

授業者 教諭 関根 基己

対象クラス 1年A組(38名)

日時 令和元年5月30日(木)2校時

使用教科書 改訂 化学基礎（東京書籍）

場所 1年A組教室

- 1 単元名 3章 化学結合 1節 イオンとイオン結合
- 2 単元目標 原子の電子配置の関係よりイオンの生成過程を理解し、説明できる。生成概念を理解したうえで、イオン式の表記や名称等を知識として習得できる。また、イオン化エネルギーなどの傾向やイオン結晶の特徴も理解する。
- 3 生徒の実態 特別進学コースの生徒で、まじめな生徒が多く、学習に対する意欲も比較的高いように感じる。一方、発表等では積極的な生徒とそうではない生徒に分かれている印象がある。
- 4 単元計画

1節	イオンとイオン結合	
	Aイオンの生成・Bイオンの分類	2時間（本時1/2）
	Cイオン半径・Dイオン結合とイオン結晶	2時間
2節	分子と共有結合	5時間
3節	金属と金属結合	3時間
4節	物質の分類	1時間

5 単元の評価基準

知識・技能（A）	思考力・判断力・表現力（B）	学びに向かう力・人間性（C）
イオンの生成について、電子配置の特徴を踏まえて理解しているか。	情報から予測（仮説）を立て、説明することができるか。	説明を聞き、自ら他のイオンについて、積極的に考察しているか。
イオン結合やイオン結晶の特徴を理解しているか。	イオンの生成等について、疑問を持ち、生成過程を類推・考察しているか。	自分の疑問・考えを他人と共有し、意見をまとめることができるか。

- 6 本時のねらい イオンの生成過程について理解し、種々のイオンを考えられる。

7 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	前時までの内容を確認する。 本時はイオンの生成、イオン分類についての学習である説明を聞く。 本時の目標を確認する。	特に電子配置について確認し、それが本時の内容に必要であることを強調する。	
	本時の目標： イオンがどうやって生成するのか理解し、どんなイオンがあるのか考える。		
展開 35分	イオンの生成について考える。 イオンの種類について考える。 考えられるイオンについて検討・発表する。 イオンの分類について確認する。 多原子イオンの生成について考える。	電子配置の安定を図るために電子の授受を行うことを気付かせる。 エネルギーの必要量が小さくなるような方法をとることを意識させる。 可能な限り、多くの種類のイオンを考え、挙げてみるように促す。 周囲（ペア）と共有させ、1種類を発表させる。 他の人がどんなイオンを考えたのか、聞き考える。 あくまで、代表的なイオンについての確認であることを説明する。 多原子イオンの生成については、簡単に触れるだけにとどめる。（次節に詳細説明あり）	（A） プリント記述 （B） 活動状況 プリント記述 （B） プリント記述
まとめ 10分	イオンの生成・種類について確認する。 次時の予告を聞く。	おおよその傾向についてまとめ、イオン生成について確認する。 次回は、イオンの大きさやイオン同士の結合についての授業であることを予告する。	

- 8 本時（本単元）における「生徒の質問力向上」に向けた取組
与えられた事実や情報をもとに、予測を立てる機会を可能な限り設けた。

北鷹研修部通信 第3号（職員用）

令和元年6月5日（水）

秋田北鷹高等学校研修部

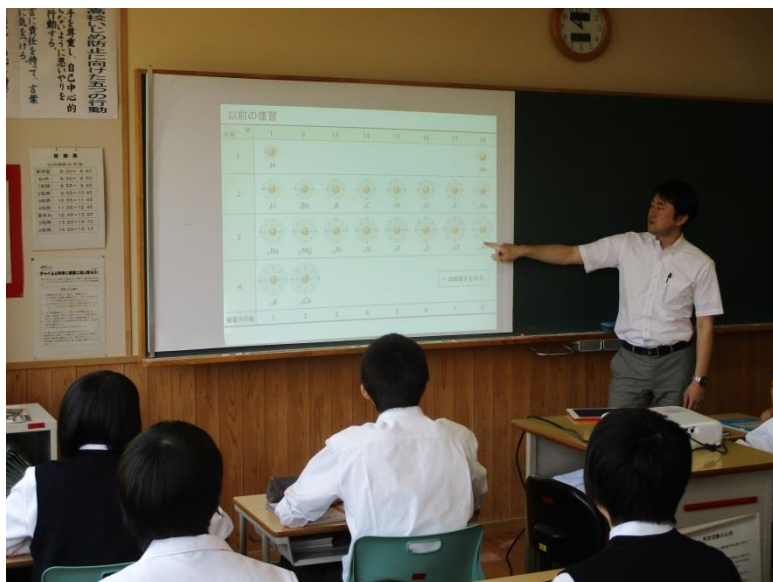
★第1回提案授業レポート（Bグループ）

5月30日（木） 1年A組 理科 化学基礎 （授業者 関根基己先生）

化学基礎では化学結合の単元を扱っており、原子の電子配置の関係からイオンの生成過程を学んでいる。本時の授業では、イオンがどのように生成されるかを理解するため、多くの種類のイオンを考える活動を行った。

まじめで学習意欲が高い特別進学コース1年生。中学時の既習事項の確認にはどんどん挙手して答えていく。

本時の目標を確認し、いよいよイオン生成について学習を進める。教科書を使わずに、与えられた情報をもとにしてイオンの種類を考えるプリントに取り組む。考えたものは周囲（ペア）と共有し、どんどん書き加える。



ペア、周囲の友人と話している間も関根先生の丁寧なアドバイスが。



どんなイオンがあるか予測を立て、自分の疑問や考えを他の人と共有、全体で意見をまとめるところまで生徒は十分に考えながら授業に参加していた。

★協議会レポート（Bグループ）

5月30日（水） 15：45－16：30 会議室

★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果



★成果（○）と課題（▲）

- 目標を提示するタイミングがよかった。再提示があるとさらに効果的。
- プリントと連動したパワーポイントで黒板に書く時間を短縮し、生徒を見て助言できていた。
- 教科書を閉じ、「考える」準備がされていた。
- 丁寧でわかりやすい。また、授業のストーリーができていて、「なんで」が入っている。
- ▲考える機会を設けるときの例示が乏しい。
- ▲ペアワークの発表の工夫。活用方法。グループでもよかったか。
- ▲黒板の右半分のスペースが使われていない。生徒の意見をまとめるなど活用を。

★指導・助言（澤口栄一教頭より）

教師の発問に生徒が挙手して答えており、生徒とのよい人間関係ができていると感じた。プロジェクターを使うと板書しなくてもよいので、生徒を観察できている。機器は有効に活用できる。また、本時の内容が一つのストーリーとして展開している。質問を工夫すれば、ねらいまでもっていけたか。提案授業を参観して自分の話し方などふだんの授業を振り返る機会になった。研修会を機に生徒の理解がより深まる授業につなげたい。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

情報機器・教具等の活用の仕方

スライドの内容と授業プリント

授業展開

本時のねらいの示し方、タイミング

クラスを考慮した生徒の活動と時間配分 生徒が迷うポイントを予測することの重要性

ペア、グループワークの方法 発問や生徒への声かけ

総体前の慌ただしい日程の中で提案授業、研究協議に臨んでくださった先生方、誠にありがとうございました。
（文責 成田八千代）

地理歴史科（日本史A）学習指導案

日 時 令和元年 5 月 30 日（木）4 校時
 対象クラス 3 年 B 組 選択者 15 名（男子 7 名 女子 8 名）
 場 所 3 年選択教室 B
 授 業 者 教諭 山内 孝太
 使用教科書 高等学校 改訂版 日本史 A（第一学習社）

1 単元名

第 1 章 近代国家の形成と国際関係の推移 第 3 節 近代国家の形成

2 教材観

幕末の動乱を経て、日本は明治政府の主導によって天皇中心の近代国家として生まれ変わることになる。本単元では、政治・経済・文化の各分野にわたって明治維新の諸改革を取り扱うが、これらが決して一元的なものではなく、相互に影響しあっていることを理解させるため、単元を通じて、歴史的事象を多面的・多角的に捉える視点を身に付けさせたい。

3 生徒観

自発的な発言は少ないものの、指名した際には自分の意見をしっかりと述べるができる生徒たちであり、授業に取り組む姿勢も真面目である。その一方、既習内容を踏まえた考察や史料の読解を苦手とし、考え込んで発言できなくなってしまう生徒も少なくないため、適宜フォローや誘導が必要である。B 科目で世界史を履修しているため、世界史とリンクさせた「世界の中の日本」という視点で近代日本の様相を捉えさせたい。

4 指導観

本時は、明治維新の改革のうち、四民平等、徴兵制、秩禄処分を取り扱う。多面的・多角的な視点を身に付けさせるため、華族（政府）、士族、平民の 3 つの視点から改革の意図や影響を考察させる。この考察を基に、これらの政策がのちの士族反乱の火種となったことを理解させる。

5 単元計画（全 10 時間）

- | | | |
|---------------------------|-----------------------|------------------------|
| 1 江戸が東京になった ...1/10 | 4 欧米文化がはいつてきた ...4/10 | 7 国会開設が決まった ...7/10 |
| 2 天皇の軍隊がつくられた ...2/10（本時） | 5 日本の国境が定まった ...5/10 | 8 地主制が進行した ...8/10 |
| 3 スローガンは「富国強兵」...3/10 | 6 爆発する農民や士族の不満...6/10 | 9 立憲政治がはじまった ...9/10 |
| | | 10 国会がはじめて開かれた...10/10 |

6 単元の評価基準

知識・技能 (A)	思考・判断・表現 (B)	主体的に学習に取り組む態度 (C)
資料等を通じて明治維新の諸改革の目的と結果を知識として身に付け、日本の近代化の過程を理解している。	近世以前の社会状況をふまえ、明治維新による社会の変容と国際関係の変化を考察し、自分の言葉でまとめることができる。	現代社会と近代初期の日本を比較し、それぞれの課題を他の生徒と協働して追求しようとしている。

7 本時の指導目標

「国民」の創出が士族反乱の背景となったことを理解させる。

8 展開（A：知識・技能 B：思考・判断・表現 C：主体的に学習に取り組む態度）

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	・本時の学習内容の確認。 本時の目標：四民平等による人々の変化を理解する。	・中学校での既習内容を確認する。	
展開 40分	・四民平等について説明を聞き、それぞれの立場（華族（政府）、士族、平民）から政策を評価する（文章、三段階）。 ・同じ立場の生徒同士で紹介しあい、グループの統一意見を全体へ向けて発表する。 ・徴兵制、秩禄処分についても同様の活動をおこなう。 ・評価をもとに、気付いたことを述べさせる。	・机間指導で助言する。 ・発表内容を黒板に残す ・グループの評価を簡潔に紙に書かせ、黒板に掲示する。 ・士族がこれらの政策に不満を持っていたことに気付かせる。	・歴史的事実や背景を根拠にした考察ができているか。（B）
まとめ 5分	・プリントの空欄を自分の言葉で補充する。 ・代表生徒数名が発表する	・机間指導で助言する	

9 本時における「生徒の質問力向上」に向けた取組

グループ内で議論させることで、根拠を持って自分の意見を他者へ伝える力を養う。

北鷹研修部通信 第4号（職員用）

令和元年 6月6日（木）
秋田北鷹高等学校研修部

★第1回提案授業レポート（Cグループ）

5月30日（木） 3年B組 科目名 日本史A （授業者 山内先生）

※授業の概要

明治維新の諸改革の一つ、四民平等による人々の変化を理解する授業でした。生徒は華族（政府）、士族、平民の3グループに分かれ自分だったらどう思うか、という事を書いたあとでグループで紹介しあい、統一意見を全体に向けて発表しました。自分のこととして考えたことで理解が深まる授業でした。



四民平等についての説明を聞きました。

大名 公家	→華族
武士	→士族 廃刀令
農民 町人	→平民 苗字を名乗る
えた ひにん	他の身分と結婚可に

戸籍法によって人々は壬申戸籍に登録

説明の後生徒達は「もし自分がこの立場だったら」という考えをプリントに記入しグループで考えを紹介しあいました。



その後グループでの統一意見を全体に発表していました。

質問が出る展開には時間不足でしたが、活発に話し合い自分のこととして考えたことで理解を深めていたようでした。

★協議会レポート（Cグループ）

5月30日（水） 15：45－16：30 会議室

★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果

★成果（○）と課題（▲）

- 時間を設定したことで生徒の集中力や意欲を高めていた。
- コミュニケーションがとれていた。グループ活動で全員が発表した。
- 歴史の問題を自分の問題として捉えさせていた。
- ▲ 座席の移動の時間がもったいなかった。
- ▲ 生徒の発言を教師がくり返して全体に共有するとよかった。
- ▲ 質問する時間があまりなかった。

★指導・助言（青山校長先生より）

質問するということは主体的に学び、対話があり深い学びにつながります。

- ①質問をさせるには場面を作らないといけません。小中学校の先生が上手なので研修させてもらいに行ってください。
- ②グループ活動にはルールが必要です。司会、記録、発表をする人を決めておく時間の短縮になります。
- ③ゴールはどこであったのか考える必要があります。生徒は活動していましたが活動が目的ではないのでしっかりとゴールに到達させてください。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・「身分」になりきって話し合うことは面白かった。取り入れたい。
- ・タイマーを使用し作業や思考にタイムリミットを設けていた。
- ・評論の学習の際、日本史の知識が生かせるのもっと興味がわくと思った。

家庭基礎 学習指導案

指導者 小栗 美香子

対象クラス 2年N組

場所 調理実習室

日時 令和元年10月15日(火) 6校時

使用教科書 新家庭基礎(実教出版)

1 単元名 第2編 生活をつくる 第1章 食生活をつくる

3 食品の選び方と安全 [学習指導要領内容 (1) 食生活と健康]

2 単元の目標 栄養と食事、食品と調理などを食生活に関わる基礎的・基本的な知識と技能を実験・実習を中心とした学習活動を通して身に付け、食事作りを中心に、栄養、食品、調理の学習を相互に関連付けながら、食生活に関わる情報を適切に判断し、生涯を通して健康や環境に配慮した安全な食生活を営むことができるようにする。

3 生徒と単元 男子17名、女子18名、計35名。発言をすることが苦手という生徒も多いが、クラス全体に投げかけた問いに積極的に答える生徒もいる。1学期の学習では、自立とはどういうことか自分なりに答えを見出そうとする生徒も多くみられた。食生活分野の学習においては、生活に身近な課題を提示し、学んだことを生活に活かそうとする力を養うことが大切であると考えた。本授業は、できるだけ体験を通して考えさせ、学びを深めさせたいと考え計画した。

4 単元の全体計画(17時間)

- (1) 私たちの食生活・・・1時間
- (2) 栄養と食品のかかわり・・・4時間
- (3) 食品の選び方と安全・・・2時間
- (4) 食事の計画と調理・・・8時間
- (5) これからの食生活を考える・・・2時間

5 単元の観点別評価規準

関心・意欲・態度(A)	思考・判断・表現(B)	技能(C)	知識・理解(D)
・自己や家族の食生活を見つめ、課題をみつけ、改善しようとしている。	・食の安全や食品の調理上の性質、食文化の継承を考慮した献立作成や調理計画、健康や環境に配慮した食生活について考えることができる。	・安全で、衛生的に調理を行うことができる。	・ライフステージに応じた栄養の特徴や食品の栄養特徴や食品の栄養的特質、健康や環境に配慮した食生活について理解できる。

6 本時の計画

(1) ねらい[評価の観点]

- ・「食品表示を読み取り、食品添加物について詳しくなろう。」
- ・食品添加物の役割を知る。[知識・理解]
- ・費用、安全、栄養、嗜好などに配慮した食生活のあり方を考える。[思考・判断・表現] (→裏面へ)

(2) 展開 (45分)

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	・本時では、調理済みの食品、加工食品について学ぶことを知る。 ・考えるための資料としてプリンを試食して、材料を考える（試食の準備）。 発問1 「今、何を食べたか、考えてみよう。」	・現在までの調理実習、実験などを踏まえ、食べて考える授業を行うことを伝える。	
展開 30分	・食べたプリンの材料を考えるために、手作りプリン为例にあげて、原材料を考える。 ・手作りのプリンを作るときの材料を挙げる。 発問2 「もう一度、皆さんが今、何を食べたか、考えてみよう。」 ・市販のプリンの材料が、手作りプリンの材料と同じかどうか、食品表示を確認する（試食の片づけ）。 ・本時の目標を確認する。 本時の目標 「食品表示を読み取り、食品添加物について詳しくなろう。」 ・食べたプリンの材料に、卵が入っていない理由、香りの原料などを考える。 ・食紅の色素を例に挙げ、どのように味覚が左右されるか、考える。 ・食品添加物の役割を知る。 ・2種類のハムの表示を見て、自分であればどちらを買うか、考えを発表する。	・手作りプリンとは製法も違うことを補足する。 ・単に健康によくないというイメージを持つのではなく、種類、働き、問題点などを正しく理解することが大切であることを補足する。	・食品添加物の働きが分かった。（ワークシートD）
まとめ 5分	・食品添加物を摂取するうえで、気を付けたいことをまとめる。 ・健康的、経済的な食生活を営むために表示を読み取るための情報を集めることの大切さを知る。	・安価なものを単純に健康に良くないとするのではなく、そればかりを食べることが有毒物質を多く摂取することにつながることを補足する。 ・時々手作りの料理を楽しんだり、野菜や果物を摂ったりするなど偏りない食生活を歩むことが大切であることを補足する。	・費用、安全、栄養、嗜好などに配慮した食生活のあり方を考えている。（ワークシートB）

準備するもの：安価なプリン、食紅（あれば黄色、青色）

家庭基礎	月 日 曜日	年 組 番 氏名
------	--------	----------

目標：「食品表示を読み取り、食品添加物について詳しくなろう。」

1 なぜ、フリンの味がするのか、考えてみよう。

2 食品添加物とは何だろう。

働きを抑えよう

①

②

③

④

⑤

聞いたことあるかな？

発色剤・・・亜硝酸ナトリウム

甘味料・・・サッカリン

着色料・・・赤色2号、コチニール色素

防かび剤・・・OPP、TBZ

3 あなたなら、どちらのハムを選びますか。

理由：

4 加工食品を選ぶとき、気を付けたいことを書いてみよう。

北鷹研修部通信 第5号（職員用）

令和元年 10 月 16 日（水）

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート（Cグループ）

授業日：10月15日（火） 2年N組 家庭基礎 （授業者 小栗先生）

授業冒頭「いただきます！」の声が調理実習室に鳴り響き、プリンの実食から授業はスタートしました。「市販のプリンには卵は入っていないのに、なぜ卵の味がするのか？」という小栗先生の問いかけに、生徒は「錯覚」「色でそう思わせている」と反応、食紅の実演で「正体は食品添加物だ」と気づきます。2種類のハムの食品表示を比較し、「どちらを選ぶか？」という問の考察を通し、生徒は安全・栄養・嗜好等に配慮した食生活の在り方を考えていました。



授業冒頭、プリンを食べる生徒達。「実食」「実物」「実演」が生徒の興味・関心を高め、学習意欲の向上に結びついた、という声が協議会で多く挙がりました。この後、小栗先生から「今、何を食べたか？」という問いかけがあり、手作りプリンの経験者達が「卵！」と元気に反応。

市販のプリンの食品表示を見て「原材料」を確認する生徒達。「卵は入っていないのに、なぜ卵の味がするのか？」という発問に対し、各班とも真剣に頭をつかっていました。



☆外部参観者の声（鷹巢中 小笠原由香先生）

身近なものをとりあげることで興味深く学習に向いていると感じました。普段の生活の中からつながりに気づける、必要感をもって取り組める題材だと感じました。食品表示については中学校でも学習するので、参考にさせていただきたいと思います。

準備や片付けの手順が定着していて、スムーズに進められていると感じました。無駄な動きをする生徒がいなくて、さすが高校生だと感じました。

10月15日（火） 16:05－16:50 会議室

★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果



★成果（○）と課題（▲）

- プリン・食紅等の「実物・実食・実演」が生徒の意欲向上につながっていた。
- 生徒の様々な発想を、教師が引き出していた。
- 生徒を動かす努力が多々見られた。
- 「どちらのハムを選ぶか？」という問により、生徒が思考力を働かせていた。
- ▲各班の話し合いは「活発」とは言えなかった。
- ▲知識不足のためか、「添加物」より「価格」に着目してしまった生徒がいた。
- ▲生徒に質問を出させる仕掛けが必要だった。

★指導・助言（成田教頭）

生徒の動きから、「授業のルール」の定着が見てとれた。「この日の単発」ではなく、日常の指導の丁寧さを感じた。グループでの話し合いの内容を発表させたり、質問させる場を設けたりすると、更に良かったと思う。参観していて、「生徒の知識量がもっとあれば、高いところに導けた」と感じる部分もあった。普段、授業を進めるにあたり、苦労も多いだろうと思うが、大変よく指導されている。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・まとめ・振り返りの時間が確保されており、評価へとつなげやすい。
- ・ハンドアウトが展開・まとめまですっきりと考えられて作成されていて良かった。
- ・地理分野の「食の安全」「偽造問題」と関係のある内容でした。
- ・授業内のルールがしっかり決められていた。
- ・現物を食べてみるのが参考になった。身近な物事は教材として良いと感じた。

数学A 学習指導案

授業者 教諭 石黒 翔之
 日 時 令和元年10月23日(水) 6校時
 場 所 1年A組教室
 クラス 1年A組(38名)
 教科書 新編数学A(数研出版)

1 単元名

第1章 場合の数と確率 第2節 確率

2 単元目標

場合の数・確率について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察する能力を養い数学の良さを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てる。

3 生徒の実態

男子18名、女子20名、計38名の特別進学クラスである。全体的に授業に向かう姿勢は前向きで、積極的に発言をする生徒も見られるが、数学に苦手意識を持っている生徒も多い。そこで本単元では、できるだけ身近な事象を扱い、生徒に興味・関心を持たせ、いろいろな場面の確率について数学的に思考することの良さを感じ取り、大学受験に対応できるような力をつけてあげられるように指導したい。

4 単元計画

第1次 事象と確率・・・2時間
 第2次 確率の基本性質・・・3時間
 第3次 独立な試行と確率・・・3時間(本時2/3)
 第4次 条件付き確率・・・2時間

5 単元の評価基準

関心・意欲・態度(A)	数学的な見方や考え方(B)	数学的な技能(C)	知識・理解(D)
確率の考え方に興味を持つとともに、数学のよさを認識し、事象の考察に活用して数学的な考え方に基づいて判断しようとする。	事象を数学的に考察し表現したり、思考の過程を振り返り多面的・発展的に考えたりすることを通し、数学的な見方や考え方を身につけている。	事象を数学的に表現・処理する仕方や推論の方法などの技能を身につけている。	基本的な概念、原理・法則などを体系的に理解し、基礎的な知識を身につけている。

6 本時のねらい

- ① 独立な試行の確率の求め方を用いて、意欲的に応用問題に取り組もうとする。(A)
- ② 既習内容を用いて反復試行の確率を数学的に求めることができる。(C)

7 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	独立な試行の問題1を復習する。 反復試行の確率の問題2について考える。	条件の違いについて気づくように促す。	(A)
	本時の目標：反復試行の確率を求めることができる。		
展開 30分	グループで話し合いながら問題を解く。 解法を発表する。 反復試行の確率の問題2について考える。 解法を発表する。 反復試行の確率についてまとめる。	できた班からミニティーチャーとして違う班へ派遣。 できた班からミニティーチャーとして違う班へ派遣。	(A) (A)
まとめ 10分	スタディサプリでまとめの問題を解く。	正答率をタブレットで確認する。 出来ていない生徒・間違った生徒に対してフォローする。	(C)

8 本時(本単元)における「生徒の質問力向上」に向けた取組

グループ活動、ミニティーチャーを活用し、生徒対生徒の場を設ける。

北鷹研修部通信 第6号

令和元年10月25日(金)

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート (Aグループ)

10月24日(水) 1年A組 数学A (授業者 石黒 翔之先生)

赤玉と白玉が何個か袋に入っており、そこから玉を取り出すときの確率を扱いました。これまでに学習した独立な試行を復習し、反復試行の確率を求めることができるようになるというねらいの授業でした。グループ活動・ミニティーチャー(教える生徒)・スタディーサプリの使用がありました。

問1 赤玉2個と白玉3個が入った袋から玉を1個取り出し色を見てから元に戻す。この試行を3回行うとき、1回目・2回目は赤玉、3回目は白玉がでる確率をもとめよ。(答 $12/125$)

問2 赤玉2個と白玉3個が入った袋から玉を1個取り出し色をみてから元に戻す。この試行を3回行うときちょうど2回赤玉がでる確率を求めよ。

(答 $36/125$)



教えるミニティーチャー・教わる生徒

グループで話し合いながら問題を解き、できた班からミニティーチャーとして違う班へ派遣。ミニティーチャーは他班に教えます。代表のミニティーチャーが全体に解説します。ミニティーチャーのおかげで理解できた生徒、更に理解を深めるミニティーチャーの姿がありました。分からない生徒に理解してもらい、理解出来た生徒にはもっと伸びて欲しいと願う石黒先生の授業スタイルでした。

★協議会レポート（A グループ）

10月23日（水） 15：45－16：30 会議室

★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果



★成果（○）と課題（▲）

- 生徒を動かすための説明が意欲をひきだしていた。
- 個人で考えさせる時間があり、ミニティーチャー・グループワーク・スタディーサブリと完成された授業であった。
- 説明を聞くとときは顔をあげさせ、メリハリをつけていた。
- 理解させるためのスモールステップが組み立てられていた。
- ▲導入で分からなかった生徒には手をかけてあげてほしい
- ▲質問は出なかったが全員理解したのか。まとめの時間が不足していた。
- ▲ミニティーチャー以外のコミュニケーション能力は高まったのか。
- ▲もっと苦しんで考えさせたらよかったか。

★指導・助言（澤口栄一教頭より）

独立な試行から反復試行までスモールステップを踏んで理解させるよい方法であった。説明を聞くとときは顔を上げさせていた。生徒は計算するときに約分を最後にやっていたが約分は先にさせて計算させないとミスしてしまう。数学におけるコミュニケーション能力は説明力ではないか。そのためには書かせないといけない。国公立の二次試験はもちろん、センター試験でも今後あるかもしれない。グループワークは考えない人がいることがある。適正な人数は3人か。演習を多くやって定着を図っていく必要がある。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

ミニティーチャーの活用やグループ学習が効果的	教えあいは大切
スタディーサブリの活用	スモールステップをふんでの丁寧な授業展開
顔を上げる指示	教科書を見るタイミング

英語科（コミュニケーション英語Ⅲ）学習指導案

日 時 令和元年 10 月 29 日（火）6 校時
 対象クラス 3 年 B 組（41 名）
 場 所 3 年 B 組教室
 授 業 者 教諭 山條 陽子
 使用教科書 Revised BIG DIPPER
 English CommunicationⅢ(数研出版)

1 単元名

Lesson11 Keys to Winning (勝利へのカギ)

2 教材観

プレッシャーに負けずに実力を発揮する方法を紹介している英文を読み、それらをスポーツや試験などで実際に使用することで、成功への後押しにしたい。また、複数の成功者へのインタビューに触れることで、自分にとって勝利へのカギは何かを考える機会としたい。

3 生徒観

男子 17 名、女子 24 名、計 41 名。自発的に発言をする生徒は少ないが、書く活動には挑戦する姿勢が見られる。英語に苦手意識を持っており、基礎基本が身につけていない生徒も多いが、ペアやグループでの活動を取り入れながら共に学ぶ姿勢を身につけたいと考えた。

4 単元計画

1 単元の導入、新出語句の確認(1/4) 2 内容把握(2/4,3/4) 3 表現活動(4/4)・・・本時

5 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度(A)	表現の能力(B)	理解の能力(C)	言語や文化についての知識・理解(D)
- 本番で力を発揮する方法に興味を持ち、本文を意欲的に読んだり聞いたりする。 - 本文内容に関する質問に積極的に答えようとする。	- 本文に関する感想や意見を、クラスメイトに説明することができる。 - 自分の体験談や、どの方法を実践したいかについて、発表することができる。	- アスリートが行っている方法と、それらに効果がある理由について理解できる。 - 自信をつけるための方法が理解できる。	- 文章全体の構成・各パラグラフの役割を把握しながら、英文を読むことができる。 - アスリートが勝利を得るために、さまざまな方法をとっていることを知っている。

6 本時の目標

成功者へのインタビューを通し、自分にとっての勝利へのカギをつかむ。

7 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 (5 分)	・前時までの学習内容を復習する。	・クラスメイトに伝わるよう、大きくはっきり答えるよう促す。	
展開 (30 分)	・本時の目標を提示する。 成功者へのインタビューを通し、自分にとっての勝利へのカギをつかむ。 - ペアで協力して質問事項とその答えを考える。 - ペアで発表練習をする。 4 人グループでお互いのインタビューを発表し合う。 - いくつかのグループがクラスに発表する。	- プリントに記載された情報をもとに、聞き手に伝わるインタビューにするよう指示する。 - 発音に自信のない生徒へ援助する。 - お互いの発表を聞いて、必要があれば自分達のインタビューに訂正や付け足しをする。 - 自分にとっての勝利へのカギを考える手がかりにさせる。	(C)
まとめ (10 分)	・自分にとっての勝利へのカギをまとめる。	・教科書の内容や、本時のインタビューを振り返る。	(B)

8 本時における「生徒の質問力向上」に向けた取組

インタビューの場面設定をすることで、質問への意欲を高める。

北鷹研修部通信 第7号

令和元年10月31日(木)

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート (Bグループ)

10月29日(火) 6校時 3年B組 コミュニケーション英語Ⅲ (授業者 山條陽子先生)

単元は Keys to Winning (勝利へのカギ)。

プレッシャーに負けずに実力を発揮する方法を紹介している文章です。黒柳徹子が成功者にインタビューするという設定で、質問や答えを考えていきました。グループでそれぞれ違うアスリートが割り当てられ、ペアで発表練習を行った後、グループでインタビュー発表をしました。



カードを使った warm-up。

3年生の声が大きいことにも驚かされました。確認の後、生徒は全員起立。ゲーム性のあるオープニングで、生徒ははらはらしながらも楽しく質問に答えています。

活気あふれる授業が始まりました。

「徹子の部屋」の黒柳さんになりきり、各アスリートにインタビューをしていくという課題設定です。グループごとにそれぞれ別のアスリートが割り当てられます。しかしアスリートの紹介プリントは、日本語で書かれています。

(有名アスリートにまじって、伊勢先生の紹介文も) 生徒は一生懸命辞書を引ながらペアでインタビューと回答を考えていきます。グループで、お互いの発表を聞いてから自分たちのインタビューに手を入れます。最後にいくつかのグループが全体で発表しました。



☆外部参観者の声 (鷹巣中 柴田保先生)

単語の確認も含めて、導入は本時に役立つものであったか。指示を板書するなど、明らかにすることで活動が楽になると思った。コミュニケートのレベルはどうだったのか。生徒は頑張っていました。仲良く男女とも交流している様子が very good でした。

★協議の視点

- 1 生徒の意欲を高める手立てとその効果
- 2 生徒のコミュニケーション能力を高める手立てとその効果
- 3 生徒の思考力（考える力）を高める手立てとその効果
- 4 生徒の質問力を高める手立てとその効果

★成果（○）と課題（▲）

○徹子の部屋、有名アスリートへのインタビューなど、生徒になじみのある内容に関心をひきつけている。

○インタビューに四つの要素が含まれており、生徒の意欲をひきだしていた。

○ペア、グループなどコミュニケーション力を高めるための手立てが工夫されている。

○英語での質問とそれに対する回答など、インタビューを考えさせる要素が多くつまっていた。

○アスリートの資料が準備されていたので辞書をひいたり自分たちで調べたりして、ペアで作業をすすめることができた。この過程でもコミュニケーション能力を育てていた。

▲生徒の現状がどうで、それに対してどの力をどのくらい力をアップさせるかという視点が見えにくかった。



▲「知りたい」と思わせる工夫がほしい。たとえば、「勝利へのカギを引き出す質問」を考えさせるのはどうか。

▲相談し、活発にやりとりするグループがほとんどだが、グループ間格差があったのではないかな。

▲時間配分がうまくいなくて、本時の目標にたどりつけなかった。目標が教科科目の目標にそうものであったか。

★指導・助言（青山仁校長より）

英語はコミュニケーションのツールである。ハサミの使い方を覚えるように、何度も繰り返すうちに使えるようになる。使うようになって母国語への理解も深まる。生徒の声が大きく、インタビューで情報を引き出していくという方法がよい。書いてしまうと間違いが目立つので会話で進めてもよかったかもしれない。力の差が大きいので参加せざるをえない場を作るのが大事。ペア、グループで積極的に英文を作ろうとする姿勢態度がよくできていた。グループごとに全然違うインタビューができて良かった。ねらいにあった「自分にとって勝利へのカギは何か」は私たち大人にとっても難しい。生徒の「知りたい」意欲を多く引き出して定着を図っていく必要があるだろう。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

インタビュー形式のような、対話を通した活動が面白い。アスリートのインフォメーション・カードが良かった。提示された資料に真剣に向き合う姿、生き生きとした生徒の姿が見られた。